

思いのままに

楠瀬 健昭

08年 夏

黒潮の
まぶしい夏
水平線から湧き上がる雲

サーファー雲の波に乗る

山々の上に
幾層倍も高く伸びた雲の峰

火を噴く怪獣ゴジラに
槍を構える馬上の騎士

おなじみの入道
大きな鼻の男と談笑する

盤上にかぶさる
両対局者

悠然と舞う巨大な鷲
ドラゴン身を躍らせ天に昇る

抱き合う恋人たちの群れ
地中海の海辺

際限なく沸き起こるストーリー
その終焉は夕暮れ

一面の星の中
流れ星
三筋
宙に舞う

君に

できると思えばできるさ
できるかできないか
迷っているうちは
できないさ

落ち着け
立ち止まり考えること
結論を急ぐな

いたずらに
恐れることのないように
目を見開いて
立ち向かえ

心の中に
妖怪を創り出していないか

君の前に
本当に困った問題があるのか

たしかにあるかもしれないが
いたずらに
問題を大きくしていないか

やればできるじゃないか
そう
ひとつひとつ解決するしかないのだよ

ぬくもり

夜明け前
障子が開き
投げ入れられた
セイダイテ、イテコイヨ

アサハアサボシ、ヨハヨボシ
歌いながら、闇に消えた
声の主

まどろみながら聞いた
その言葉を胸に
いくたび故郷をあとにしたことか

田舎へと向かう
列車の中で
わたしは
徐々に
都会の衣を脱ぎ棄てる

都会へと向かう
列車の中で
わたしは
水と空と大地と光を
失う

やがて
鎧を纏った
わたしは
夜の街に降り立つ

そんなことを繰り返す中で
またひとつ
ぬくもりが地上から消える

森のざわめき

森がざわめき
新たな春がめぐり来る

これもまた憂鬱な春であったとしても
森は知らない

ただ、ざわめき新たな春を始める

池の向こうの森が
体を大きく震わせる

鋼色の空に
かすかな晴れ間が見えてくる

しかし、森は知らない
ただ、池の上に迫りくる
体を大きく震わせて
池の上に迫りくる

水面に映る森が
いつの間にか池を覆い尽くす

しかし、森は知らない

ただ、やわらかな葉叢に
やわらかい雨を浴びながら
立ち尽くす

天網恢恢

諸君、我々は敗北した
この事実は潔く認めよう

なにがどうあれ
敗北は敗北

我々と言っても
語る相手もなく
私は敗北したというのが正確だろう

気がつけば
足を引っ張られ
手をつかまれ
身動きできなくなっている

このまま、なすすべもなく
後退あるのみ

ずるずる後退するがいい

やがて、時が来れば
すべてが明るみになる

そのことを耳にしたときの
奈落の底に突き落とされたような感覚も
今はもう消えてしまった

お怒りでしょうと言われても
ただただ、あきれるばかり

しかし
そのあと
どうなるのかという
想像力もないのでしょうか

いったい
そうすることで
何がどうなるのでしょうか

いったい
何か得られるものが
あったというのでしょうか

いったい
何のために
このようなことをするのでしょうか

これを狂気の沙汰といわずに
なにを狂気の沙汰と言うのか